



414  
A758  
2

在日本英國代理官

ハルマールガセットニ投ス

千八百八十一年六月七日巴里ニ於テ

イ、エツチ、ハウス稿

余ハ暫時英國ニ不在ナリシガ為メニ余カ嘗テアトラ  
ンチツク、モンズリーノ紙上ニ於テ其人ノ態度及行爲  
ニ就テ論裁シタル在日本英國公使ノ處置ニ関シタル  
其紙上ノガセツト新聞ノ議論ヲ知ルニ由ナク而シテ今  
日知得タル所モ尚未々其一ニ過キスト虽氏既ニ余  
輩ノ確實ナル所論カ概子所以ナキノ否議ヲ以テ待セ  
ラレタランヲ覺悟シタリ故ニ今余輩ハ一書ヲ其紙上ニ  
投シテ余カ初論ノ妄ナラザルヲ併シ併セテ論旨タル

大正十一年四月  
大隈侯爵郵寄贈



官吏ノ行為ヲ詳細ニ摘載シ以テ該官吏ヲ保庇スル論者ノ睡魔ヲ覺破シ遁辞ヲ用ユルニ地ナカラシメント欲ス記者宜シク其紙上ヲ惜ム勿レ  
嚮キニ余カアトランケツク、モンスリトニ於テ諳ニ公使ノ身上ニ論及セシ所アリシハ之レ只其本論ノ枝葉ニ過キガリシカ故ニ其事實ヲ叙スルニ於テ實ニ詳細ニ至ラサリシカ令ヤ其行為ノ詳細ヲ摘載シ以テ當路者ノ審査ニ便シ以テ凡ソ此事ニ意ヲ注クノ人ヲシテ余カ告状ノ虛実如何ヲ明竅スルノ便ヲ得セシメント欲スルナリ

余ハアトランケツク、モンスリトニ於テ公使ハ日本政府ノ指定セル海関所設ノ場所ニ依ラスシテ随意ニ上陸スル英人ヲ保護スルヲ名トシテ要港ノ沿岸ニ外兵ヲ留置センヲ脅請セリトノヲ記センカ抑モ此事タル日本屯在ノ營兵(此屯在ハ在留英人ノ安全ヲ保護スル為メ必要ナリトノ口實ニ出ツ)引拂ノ少シク前ニ至テ税関ハ此等ノ規定外ノ場所ヨリ随意ニ上陸スル人民ノ非常ニ密商ヲ行フヲ發見セリ蓋シ政府ハ物品ヲ受取り且ツ之ヲ監査スル為メニニヶ所ヲ備ヘ相去ルテ半英里ナリ之レ實ニ商業上ノ需用ニ向テ充分

足レリトナス然レモ沿岸何レノ場所ヲ問ハス舟ヲ走  
ラセテ其貨物ヲ密賣スルノ陋習ハ遂ニ一ノ重大ナル  
害ヲ為スニ至リシカ故ニ政府ハ適當ニ指定セル場所  
ニ由ルニ非ザレバ何人タリトモ決シテ上陸ヲ許サズ  
ルノ令ヲ發セントセシハ是レ自國保護ノ為メニサモ  
アルベキコトニシテ相當ナル處置ト云フベキナリ然ル  
ニ公使ハ之レヲ探知シ外務卿ノ手ヲ經スシテ直チニ  
書ヲ太政大臣ニ寄セ若シ斯ル布告ヲ發スルアラハ兵  
卒ヲ沿岸ニ布キ以テ英國人民カ何處ヨリ上陸スルモ  
之ヲ保護シテ禍害ヲ蒙ムラガラシメントスト蓋シ外

務省ヲ差措キ直チニ太政大臣ニ通シタルノ一事ヲ以  
テ現行ノ外交例規ヲ破リタル者トナスベキハ殆ント  
余カ辨明ヲ待タサル所ナリ然レモ尚眼ヲ一層重大ノ  
点ニ着スレハ此等ハ敢テ顧ミルニ違アラズ但シ此脅  
迫ハ充分其効カヲ表ハシ日本政府ハ豫シメ此布令ヲ  
發行シテ為メニ受ケントスル所ノ侮辱ヲ避ケ遂ニ此  
令ヲ發スルコト能ハスシテ止ミタリ故ニ密商ハ少モ抑  
制ヲ受ル所ナク愈々其惡業ヲ擅マ、ニスルコトヲ得タ  
リシカ恐ラクハ今日モ尚ホ此弊ノ存續スルコトナルベ  
シ然リ而シテ此事件ノ來歴ハ當時日本ヨリ女皇陛下

外務省ニ照会セシカ果シテ回答ヲ受ケシヤ否ヤ余  
ノ知リ得ル所ニアラザルナリ

余ハ先キニ公使カ職権内ニナキ布令ヲ發シ英國商人  
ヲシテ定規ノ輸出石炭稅ヲ免レシメ其結果ハ日本政  
府ノ國庫ヲシテ大ナル損失ヲ負ハシメタルトノ事ヲ  
記セシカ今其詳細ヲ説カンニ千八百六十九年、末公  
使ノ印ヲ捺セル布令ノ發スルアリ曰ク公使ト日本政  
府トノ間ニ一ノ規約ヲ為シ尔來輸出發船ノ氣船ニ蓄  
フル所ノ石炭ハ凡テ該船航海用ト見做シ關稅ヲ免除  
スベシト此時ヨリ石炭ノ關稅ヲ廢シ帝國ノ歲入幾千

磅ノ減少ヲ來セリ日本政府ハ公使ニ向ヒ寂モ公明ナ  
ル手續ヲ以テ屢々斯ル契約ヲ一致セルノ証跡ヲ請求  
スレトモ未タ且テ之ヲ示サス蓋シ示スト能ハサルナ  
リ何ントナレハ素ヨリ斯ル証跡ノ存スルトナケレバ  
ナリ故ニ日本政府ハ断然斯ル處置ヲ承諾セシトナキ  
ヲ主張スレ氏唯談判ノ際前段ニ均シキ脅迫ヲ再々見  
ントテ恐レテ今日ニ至ル迄其損失ヲ忍ヘルナリ  
余ハ日本人就中廟堂ノ紳士ニ加ヘタル暴行ヲ記スヘ  
シ此事件ハ數年前神戸ニ起リシトニシテ紳士ハ方今  
兩大臣ニ垂クベキ叅議ノ位置ニ居レリ然レ氏余ハ事

件ノ起リシ當時彼紳士カ此顯職ニ居レリト了知セラ  
ル、勿ラシクテ欲スルナリ其事ノ根元ニ至テハ傍ニ  
在リテ目撃セル人ト虽モ能ク会得シ若シタハ想像ス  
ル能ハサル所ナレモ該紳士ハ公使ノ為ニ捕獲セラ  
レ而シテ其際ニハ途上ニ倒サレテ頭部ヲ泥土ニ汚セ  
リ當時英國ノ官吏ニシテ今ハ日本ニ於テ有名ナル詞  
訟師トナレルエフ、ロウドル氏ハ其時數多ナル傍觀人  
ノ中ニ参レリ

其他余カアトランチツク、モンズリーニ於テ示シタル  
他ノ事項ニ就テモ一々詳明ノ資ナキニアラザルモ若

シ然セシニハ余リニ論域ヲ超ヘルノ恐れアルト且又  
当章ノ目的ニ於テハ以上三項ノ説明ヲ以テ充分ニ事  
足レリト信スルカ故ニ敢テ其等ノ他項ニ涉ラサルヘ  
シ而カモ請フ人アラハ何時タリトモ其説明ヲ為スニ  
對蹊ヒサルヘシト虽モ若シ簡易ニ望ム所ノ目的ヲ達  
シ能フハクシテハ敢テ斯ル痛マシキ說話ヲ喋々反覆ス  
ル如キハ余ノ竅モ好マサル所ナリ其所謂望ム所ノ目  
的トハ畢竟何等ノ事ヲ指ス歟是レ竅モ見易キ事ナリ  
曰ク何ソヤ曰ク去二十五年ノ間日本ニ於テ施行セン  
方法ヲ以テ英國真ノ利益ヲ保安守護スルニ足ルヘキ

欽、疑問ヲ判然解釋スルノ穿議ヲ為スニ在ルナリ即  
チ將來兩國、後生子孫ノ間ニ真ノ友誼親愛ヲ回復ス  
ルヲモ覺束ナキニ至ル迄モ日本ノ施治者ノ耐ヘ忍ビ  
来リタル英國待遇ノ苛薄ニ由テ生起シタル嫌惡ヲ省  
ミスシテ愈益此苛薄ナル政略ヲ放マ、ニスルヲハ英  
國ノ為メ之ヲ良策ナリトスヘキカ否ヤヲ穿鑿スルヲ  
之レナリ而シテ當時ハ此穿鑿ヲ為スニ最モ好機會ナ  
リト云フヘシ何ントナレハ則チ當時公使ハ自カラ英  
國ニ在リ以テ己レカ地位ヲ復スヘキ信実アルヲ証  
明スルニ親シク充分ノ證據ヲ表示スルヲ得レバナ

リ然リ而シテ余切ニ冀フ若シ公使カ施為ヲ審査スル  
ノ時来レハ相方共ニ名モ死キ下賤者ハ放恣無頼ナル  
風話(此事件ニ関シタル其社新聞一投書ノ語ヲ用ヒ)ヲ  
信スルヲナク又日本人カ歎詠ノ輕忽誣虚ノ言語ニ拘  
泥セスシテ只公明正當ノ證據ヲ基トシ大將格蘭ド  
及ヒサー、ジョン、ヘンチツシーノ如キ人物カ嘗テ日本  
ニ於テ目擊經驗ノ結果如何ヲ証見トセラレシヲ果  
シテ然ラハ則チパークス氏カ何等ノ官吏ノ身上ニモ  
未タ曾テ從來ニ見カリシ如キ歎詠ヲモ輕視シテ久シ  
ク保守シ來リタル地位ニ適當セシ者ナル欽ヲ充分ニ

覚悟スルニ至ルベキナリ

大正